

三瓶山と人

概要

三瓶山の火山活動が治まると、植物が茂り、山は現在の外観となった。住み着く人が増え、初期の居住者の神話にひととき三瓶が取り上げられた。何世紀も経った今もなお、土地の住人たちは経済的・精神的に三瓶山と強く繋がっている。

縄文時代の生活

三瓶山が噴火を繰り返していた縄文時代（紀元前 1 万 4 千年～ 西暦 350 年）の間、三瓶山近郊には間違いなく人が住んでいた。特に、4,000 年前、小豆原埋没林ができた大噴火の日にもここに人が住んでいたようだ。林の中には人が住んでいた形跡は残っていないが、噴火前の縄文時代の土器が周辺地域から発見されている。壊れた焼物、魚網のおもしろ、稗などに使われたと考えられる臼などが三瓶山東の火山堆積層の下部から見つかった。

埋没林の木の種類や大きさ、また同時に発見された虫からその時期の生態系についてのヒントが得られる。大型動物のフンを餌にする糞虫がいることから、森には鹿やイノシシなどの哺乳類がおそらくいたことがわかる。これらの動物は当時の人の食料となっていたかもしれない。

神話と地形

島根の地形は日本最古の伝説、「国引き」神話の主題となっている。8 世紀の出雲地域（現在の島根県）の伝承記録出雲風土記によると、八束水臣津野命は島根海岸に立ち、土地が彼には狭すぎると思ったのだという。日本海を見渡すと向こう側に「余った」土地があったので、その土地を裂いて日本へと引き寄せた。彼はこれを 3 度繰り返し、2 つの大きな杭にその縄をくくりつけた。この杭が大山と三瓶山だ。この土地を「引く」ことで島根半島ができ、それぞれの端部の細い土地（西が菰の長浜で東が弓ヶ浜）は半島を本州に引き寄せた「縄」である。

【写真キャプション】 大社からの三瓶山の眺め

大社町から眺めると、地形の特徴が国引き神話を想起させる。菰の長浜の海岸線が縄を

かけた杭であるといわれる三瓶山へと伸びている。

有史時代の三瓶山

三瓶山の北側、東側、西側の斜面には草原が広がり、放牧地を求める居住者たちを惹きつけ続けてきた。明治時代（1868 年 - 1912 年）が始まった時には、およそ 3,000 頭の牛が三瓶山に放牧されていた。機械耕うん機が使用されるようになると、土地を耕すための牛の需要が激減し、1950 年代までには山の斜面にいる牛は 1,200 頭まで減った。その時でさえ、山の大部分における自然な森林再生を抑制し、草原を維持するのに十分な家畜の数であった。しかし 1970 年代までには山頂や一部の斜面で木々が再生した。

現在、約 100 頭の牛が西側と東側の草原に放牧されている。毎年 3 月の終わりに、山火事を防いで草原の生態系を維持する目的で西側の草原で野焼きが行われている。